
詩歌・小説の中のはきもの（第17回）

大塚製靴株式会社社友 渡 辺 陸

- 167 思いきり愛されたくて駈けてゆく
六月、サンダル、あじさいの花
俵 万智

サンダルの青踏みしめて立つわたし
銀河を産んだように涼しい
大滝和子

★『岩波現代短歌辞典』から。両方とも有名な歌。サンダルのすがすがしさ、さわやかさが感じられる。サンダルのキャッチコピーに使いたいぐらいだ。ただし、ヒート・アイランド現象で舗装道路の表面温度は軽く50度を上回る昨今は、熱気がじかに入り込んでくるので、見た目ほどには涼しくないのが実際である。

- 168 私は草鞋を愛する、あの、枯れた
藁で、柔らかにまた巧に、つくられた草
鞋を。あの草鞋を程よく両足に穿きしめ
て大地の上に立つと、急に五体の締まる
のを感じる。
身体の重みをしっかりと地の上に感じ、
其処から発した筋肉の動きがまた実に快
く四肢五体に伝わってゆくのを覚える。
若山牧水

★『若山牧水随筆集』から。牧水を日本の偉大な旅人の一人として数えるのに異議を唱える人はいないだろう。そういう偉人が、単に履物に感謝するのではなくて「愛する」というのが嬉しい。このような情の細かい感性の持主だから、今も万人に愛唱される

短歌を詠むことができたのである。

- 169 いつの頃からか、修ちゃんは高さ
5センチぐらいある、ポックリのような
サンダルを履きはじめました。私たちか
ら見ると、あぶなっかしくてハラハラす
るようなものなのに、本人はこれが一番
歩きやすくて体がシャンとするとって、
どこへ行くときも、何を着るときも、
こればかり履くのです。

寺山はつ

★『母の蜚 寺山修司のいる風景』から。せめて背広を着るときはやめてほしいと言うと、「高いので慣れてしまっているから、低いのを履くとかえってたよりなくて、ころびそうな気がする」と答えにならない理由を口にした。青いサンダルだったという。

- 170 御米の思わくを聞いてみると、此
所で10円足らずの金が入れば、宗助の
穿く新しい靴を誂えた上、銘仙の一反位
買えると云うのである。宗助はそれもそ
うだと思った。けれども親から伝わった
抱一の屏風を一方に置いて、片方に新し
い靴及び新しい銘仙を並べて考えてみる
と、この二つを交換する事が如何にも突
飛でかつ滑稽であった。

夏目漱石

★『門』から。明治43年の作品。親友の妻御米（およね）を奪った宗助は父と兄に義絶され、経済的援助も打ち切られ、役所勤

めの身は逼迫して、靴底が破れる状態になっていた。屏風は結局35円で売れた。秋日和ある日、宗助が縁側に出て横になっていると、「往来を行く人の下駄の響きが、静かな町だけに、朗らかに聞えて来る」。そんな時代の靴は高価なものだった。

171 靴はモンゴルグトゥルと呼び、なかが二重構造になっていて、遊牧民は昔から履いていた。最近ではすっきりした型のサリヒングトゥル（革のブーツ）を履くようになった。サリヒングトゥルは革命のころソ連より入って来たもので、乗馬ブーツの型をした格好の良い物なので、都会の人にもよく履いている。夏は老人でもサリヒングトゥルを履いているが、冬になると温かいモンゴルグトゥルを好む。都市ではデールにサリヒングトゥルを履いた年配の人を見かけるが、若者は革靴や運動靴、女性ならヒールも履く。

野沢延行

★『モンゴルの馬と遊牧民』（1991年刊）から。デールとは遊牧民が着ている服。靴下に相当するのはジールクといって、縦50センチ、横90センチの通気性の良い布で、これを足に巻く。乗馬していて歩かないので、遊牧民はブーツの中に本を差し込んで行く。世界の諸民族の履物は風土性が高く、興味深い。

172 ぼくは四季を通じてもっぱら着物で通している。従って、履物もまたエンエンと下駄というわけで。

その下駄は、いちどきに三足おろし、そのどれもが普段の下駄の気分よろしく、つねに程良い減り具合であるよう、外出に際しては、順繰り履いて出るように心掛けている。ハハハ。つまらないことを心掛けたもんだが、新品の下駄ちゅうのは、なんとなく恥ずかしく……。

滝田ゆう

★『下駄のむくまま』から。永井荷風は日和下駄を履いて下町を歩き文章にしたが、滝田は浴衣に駒下駄をはいて都内を歩き哀愁の漂う絵と、それに短い文章を付した。増上寺で一度出会ったことがあるが、異彩、いや異様な人物として記憶に残っている。カンカン帽にステッキを突いていたが、セピア色の写真から飛び出てきたようだった。

173 新品の鞣皮の靴をはいているが、それは『軍隊底』と呼ばれているたぐいのもので、鋏をうち、踵がすりへらないように馬蹄みたいな半円形の鉄輪が打ちつけてあった。男はステップに坐りこみ、烏打帽を脱ぐと、それで顔をふいた。それからまた帽子をかぶり、底をぐいと引っぱって型崩しの手はじめをやらした。ふと足のことが気になった。かがんで靴紐をほどいた。…「ありがとうよ」と彼は言った。「あんよのやつが、すっかり、へたばっちまったもんでね」

「靴が新品だからな」と運転手は言った。その声には、目と同じように、ひそかな、あてこするようなひびきがあった。「新しい靴で遠道するもんじゃねえぜーこんな暑い陽気によ」

便乗者は、埃をかぶった黄色い靴を見おろした。「ほかに靴を持ってねえのでね」と彼は言った。「ほかに、はく靴がねえとすりゃ、こいつをはくより仕方がねえやな」

ジョン・スタインベック

★『怒りの葡萄』から。砂嵐で土地が砂丘になってしまった貧農家族の悲劇的な運命が描かれた小説。絶望的な生活から抜け出すためオクラホマからカリフォルニアにヒッチハイクで向かう冒頭部である。一層悲惨な生活を暗示するかのように“軍隊底”の靴が現われる。車を降りた主人公ジョードは、「かがんで靴紐をほどき、最初は片方、つぎにもう片方の靴を脱いだ。そして気持

よさそうに湿った足を熱い乾いた埃のなかで動かした。すると、土埃の小さな雲が足の指のあいだから吹きだし、足の皮が乾いて堅くなった。彼は上着を脱いで、それに靴を丸めこみ、包みをわきの下にかかえこんだ。そして、とうとう彼は、前方に埃をけあげ、背後に低く地面にたれさがる埃の雲を残しながら道を歩きだした」。六万語を超すこの大作は映画化された。

174 ヒールのある靴をはくの。ブーツをはいた妖精なんて、想像できる？とくにつまさきに銅の鉾がうってあるブーツなんてね。

L・M・モンゴメリ

★『『赤毛のアン』の生活辞典 テリー・神川』から。アンは、ふくらんだ袖の服を欲しがったり、帽子に花をつけたいとだだをこね、良家の子女のすることではないと叱られる。戦後物資の乏しい時期は男も女も踵や爪先に鉾を打ったが女の子は鉾を嫌がったことが思い出される。1880年代のアメリカの流行は、ラウンド・トゥの2～4センチのミディアム・ヒールが好まれていたという。今年は「赤毛のアン」の出版百年目にあたる。大人が読んで面白い小説だということは案外知られていない。

175 新しい靴
大事にするんだ
ウマが合いそうだ
古い靴より長持ちするかな

古い靴
やっぱり置いておこう

大事にしよう
古い靴も
新しい靴も

佐渡山豊

★『空っぽの空から』の「靴」の一節。成長する子供は次々と脱皮を繰り返すように新しい靴に履き替えて行く。ちょっぴり古い靴に未練を残しながら。新しい靴に対する期待は大きい。脱皮を終えた大人には、もう脱皮の体験はできないのだから、せめて、羽根の乾いた成虫が空に飛び立って行くように、あんな感じの飛翔感がある軽い靴を履いてみよう。

176 内藤さんは、洋服ダンスをあけて、「どれでも、あなただったら、家内も、よろこぶでしょうから、着てやって下さい」

といて下さった。…

「これ頂きます」

そういいながら、もう越路さんから取り返される心配がないことが、悲しかった。靴も戸棚にぎっちりあり、まだ履いてないのも、沢山あった。全く新品のように見えても履いたのには、底のほうに、少しカビが生えていた。4年半の越路さんの不在を語っていた。どの靴を見ても、越路さんの声が、聞こえるようだった。

黒柳徹子

★『トットのマイ・フレンズ』から。何年か前、三越へ越路吹雪の衣裳展を見に行った。亡くなった姉がコーちゃんのファンだったので、なんとなく姉に会いに行くような気分だった。トットちゃんが衣裳でなく靴から越路吹雪の声を聞いたというのがうなづける。私も会場で、彼女の履いていた靴から流れ出る大歌手の声を聴いた。靴にはその人の分身といった雰囲気がある。内藤（法美）は作曲家。